

歴史教科書をどう考えるか 橋爪大三郎

はしづめだいざぶろう／東京工業大学教授（社会学）

歴史と歴史教科書に、人びとの関心が集まっている。

順番に考えていくため、問題を整理しよう。

まず、歴史とはなにか。

つぎに、歴史の教科書とはなにか。

そして、歴史の教科書問題とはなにか。

最後に、この問題をこの先、どのように考えていけばよいのか。

●
そこです、歴史とはなにかと考えてみると、それが矛盾をはらんだものだということに気づく。

歴史は、言うまでもなく、過去に

起こったことならについての知識である。けれどもそれに劣らず、それがいま、どう知られているか、それが現在を生きるわれわれにどういう意味をもっているか、ということが大切である。すなわち歴史は、過去／現在の両方の側面をそなえている。それはいわば、現在というメガネをかけて、過去をみることにほかならない。みえているのは過去（の像）でも、それをみているのは現在である。現在のあり方が変われば、それにつれて歴史も変わる。実際、歴史はその時代にあわせて姿を変えてきたし、これからも変化していく

だろう。

このようにして実は、歴史のあり方を考えると、現在についていろいろなことがわかってくる。過去のことがよくみえないのは、現在というメガネの問題なのではないか。歴史は、現在を映し出す鏡である。歴史が教えるように、過去に起こったさまざまなことがらが現在をかたちづかった。いっぽう、その歴史を知識として生産しているのは、現在のわれわれである。歴史と現在とは、互いが互いをうみだす関係になっている。

●
もうひとつ、歴史（ヒストリー）

は、過去のことならを「語る」こと。すなわち、ストーリーにほかならない。ストーリーであるからには、始まりがあり、展開があり、結末がある。そして、現実のできごとを「言葉」に置きかえる際のさまざまな制約にまどわれている。ある過去を語るとしても、その語り方はひと通りでないだろう。ストーリーは、語り者と聞く者とのあいだに、その語り方を通じて、共通の意味の場をうみだす。そして、過去を共有する「われわれ」という実体をつくりだす。歴史はそのような現実的な作用をもつ「物語」なのである。

●
それでは、歴史の教科書とはなにか。

歴史の教科書は、当たり前だが、学校で授業の時間に使うものだ。教室では、「教科書に書いてあることが

歴史で、教科書だから正しい」という前提でものごとが進む。教科書は、そうやって歴史を統一し、共通の歴史をもつ「われわれ」（国民）をつくりだす。

●
歴史は、ストーリーであるから、いろいろに語りうるものである。それを、教科書がひと通りに決めてしまっている。歴史の多様性が切り捨てられてしまうように思えるかもしれない。けれども、歴史はもういっぽうで、ある範囲の人びとが過去を共有しようとする努力のことである。ほかの誰とも分かちあえない歴史は、歴史とは言えない。歴史を共有する努力のひとつとして、学校教育に歴史の授業や教科書があつてよい。

●
国民国家は、印刷術やマスメディアや学校教育がつくり出した「想像の共同体」にすぎないと、よく指摘されるようになった。なるほど、そ

うとも言える。しかし国民国家が、当面、現実には人びとの生活を組織しているもつとも強力な団体であることに、変わりはない。日本も、そうした国民国家のひとつである。われわれが、どのようにその歴史を構成するかは、とびきり現実的な問題である。

●
日本が国民国家であるように、韓国も、中国も、国民国家である。どれもある範囲の人びとを組織した団体として、それぞれの歴史をもっている。そして、歴史教科書を出版したり、学校で教えたりしている。

●
では、どんな歴史をどのように教えても、まったくその国の勝手で、ほかの国は口を出すべきでないのだろうか。

●
国民国家は、ばらばらに存在するわけではない。どの国の歴史にも、

ほかの国ぐにが登場する。まして、戦争したり植民地支配をしたりした過去があれば、歴史をどう記述するかは敏感な問題になる。

日本は、民主主義国家として、つぎのような原則により行動すべきだと思ふ。

第一に、政府（国家権力）が、教科書の編集に関与しないという原則を貫く。

戦前の歴史教科書は「国定」で、政府が皇国史観を押しつけるためのものだった。現在の「検定」は、あくまでも間違いをチェックするのが目的。教科書を編集・出版する主体は政府と関係ない民間企業である。さまざまな教科書が出版されるのはよいことなのだ。河野外相が、教科書問題で抗議を受けて、外国にも配慮すると約束したのは、この原則を危うくすることになり、大失敗だった。

だろう。だから、侵略や戦争犯罪など、国家の犯した過ちやそれを支持した国民の過ちについて、よく知ることは大切だ。

けれども、これはものごとの半面である。もう半面は、そうやって歴史に学ぼうとしている人びとの団体（たとえば、日本）を肯定すること。自分たちに誇りを持ち、よりよい未来を作りだすために現在を生きることも大切だ。

歴史にはこの両方が必要だし、バランスも必要になる。そして、どちらが基本かと言えば、それは後者なのだ。ひとは、過去の過ちから学ぶことができるが、それは希望があることだ、と思えることである。さも自分がこの団体に所属するのはいいことだ、と望むことである。さもないと、過去から学ぶことができないどころか、そもそも歴史というこ

た。

中国など外国政府が、民主主義の原則を理解せず、教科書問題をなんとかしろと日本政府に申し入れてきても、なにも約束してはいけない。ねばり強く、日本の民主主義の原則（政府が歴史教科書の内容にタッチできないこと）を説明する。そして外国政府こそ、特定の歴史を国民に押しつける政策をとっていないか、厳しく批判する目をもつ。

第二に、歴史と歴史教科書の多様性にたじろがず、むしろよいことだと受け止める。

自由に出版できるはずの教科書が、これまで型にはまりすぎていた。学習指導要領のせいもあるだろうが、もともと根本には、法的根拠のあやふやな政府の行政指導でもやすやすと受け入れてしまう国民の体質があった。英語圏の歴史教科書をみると、

とが成り立たず、ただのニヒリズムになる。

戦後民主主義には、国家や政府に反対するのが市民だという勘違いがあったので、後者があいまいになった。そこで、歴史を学べば学ばほど誇りが持てなくなる「自虐史観」だと批判された。いっぽうその反動で、事実認識をねじまげてまで誇りを持つとうとすれば、「皇国史観」のようになつてしまう。どんな事実にも目をつむらず、しかも歴史に誇りをもつ。この絶妙なバランスをうみ出す努力が、歴史というものなのだ。

●
それぞれの国には、それぞれの誇りがあり、歴史がある。

すべての国ぐにが合意できる、唯一の歴史があるわけではない。歴史は、人びとの認識や価値観が多様であるように、多様であらざるをえない。

ぶ厚くて、資料批判やそれにもとづくクラス討論もできるよう丁寧につくつてある。多様な歴史がありうるを受け入れるからこそ、論争が可能になり、論争が可能だからこそ、強靱で柔軟な歴史のストーリーが鍛えられる。

歴史の専門家は、じつは、歴史教科書の書き手としてあまり適任でない。専門が時代区分で細切れになっているうえ、ふつう、哲学や思想や、表現者としての訓練もない。西尾幹二さんみたいに、一人で全体を書いたほうが、よいものができる。

第三に、歴史は現在をよりよく生きるためのものだ、と、はっきり認識する。

人間は、過ちを犯す。人間の集団である団体（たとえば、国民国家）も、過ちを犯す。過去を知らず、歴史に学ばなければ、同じ過ちを犯す

い。

そこで、それぞれの国の歴史のなにかがくい違い、矛盾したとしても、あわてなくてよい。

政府は、この問題に深入りしないのが正しい。

そのかわりに、ふつうの人びとが、互いの国の歴史について、関心と敬意をもつことである。歴史をめぐる対話が、こうして始まる。「唯一の正しい歴史」はなにかと考えるから喧嘩になる。歴史は多様であると覚悟して、相手の歴史から互いに学ぼうとするゆとりが大事だ。

こういう対話のなかから、どの国の人びとも、それぞれ真剣に歴史を考えているのだという信頼が生まれれば、この問題は解決したようなものなのである。